

「氷雪災害」 中国経済新聞 080401 掲載

年初に中国の中西部から南方にかけて発生した氷雪害は、死者が百人を超え、被害総額が千億元を上回った。折悪しく一家団欒の春節直前だったため、帰郷できぬ出稼ぎ農民が駅頭にあふれ、高速道路では数千台が何日も数珠つなぎになったまま身動きとれず、一部地域では停電がつづき、物価の急騰が庶民の台所を直撃するなど、被害と影響は建国以来最大の規模に達したとされる。

予期せぬ天災ではあったけれども、深刻な問題点も暴露されたようだ。

まずインフラでは、張り巡らされた送電線にバイパスがないので、雪の重みで一か所が切れると、一帯がたちまち停電になる。急速に伸びた高速道路にサービスエリアが少ないので、立ち往生した車の人たちは寒風のもと、食事もトイレもままならなかった。

資材の備蓄では、融雪剤を北から回して散布する余裕がなかったため、一部地域では軍隊が火炎放射器で溶かした。携行食糧から仮設トイレまでの緊急必需品は、わが国では災害対策で各自治体が常備しており、必要に応じて調達しあう仕組みができていたが、中国では備蓄も調達システムも整っていないままだったため、数日たってから軍隊の炊餐車が出動、マントウをふかして立ち往生の人たちに配ることになった。

何よりも、緊急事態に際しての報告が遅れたり、住民への広報がなされなかったなど、被災地域の地元政府の対応が後手後手に回った。だから、国務院が緊急対策会議を招集したのが発生後十日ほどたってからになり、温家宝総理は気象条件しだいで何処に着陸できるか不明のまま北京を飛び立つという、異例の事態になった。

駅に詰めかけた群衆を前に、ハンドマイクで「安心してください」と語りかける温総理。地元の幹部たちはメンツ丸つぶれだったろう。

温総理は全人代での政府活動報告で、今回の氷雪害から経験と教訓を真剣に汲み取るところを強調した。突発事件への予防・対処能力の強化が眼目とされる。

わが国では毎年九月一日、各地で地震発生を想定した演習が行われ、東京では総理大臣みずから陣頭に立つ。それに比べると、中国はあまりにもノンキ過ぎないか。トップから庶民まで危機意識を持ちつづけ、「備えあれば憂いなし」の体制を急ぎ整える必要があるのではないだろうか。

もうひとつ、かねがね感じていることがある。わが国では、農村でも小中学校に体育館があり、災害時には避難場所になるのが当たり前だが、中国では災害が起きると被災者の大半は軍用テントの生活になる。一因は、中国の多くの田舎で一番立派な建物が、学校ではなく役所だからだ。「人民に奉仕する」精神は、何処へいったのだろうか。